

04

あごうさとし  
Satoshi AGO

## 民間劇場にとっての公共性とは何か？

### 京都の小劇場の連鎖的な閉館

「劇場」は、それ自体、歴史性と普遍性と公共性を持ち合わせている空間と考えます。しかしながら、民間の小劇場に限定しますと、多くの方々からは、そのように考えて頂いているものではない、という現実があると思います。私が勤めましたアトリエ劇研には、若手の登竜門という役割があり、人材の育成や交流など舞台芸術の底を支える機能が合ったと思います。全国にある民間小劇場の多くは、同様の取り組みを行っているものと察します。アトリエ劇研は2017年8月末日に閉館しました。2015年から2017年にかけて、京都では、アトリエ劇研を含む4つの小劇場と、1つの公共スペースが閉館しました。いずれも、オーナーの高齢化か、建物の老朽化が主たる原因で、正に構造的な転換点を迎えています。民間スペースは、オーナー個人のパトロンエージェンツで支えられていたものです。ここでまず問われるのは、持続可能性の問題でした。持続できる仕組みが何故ないのか、という批判があるかと思えます。冒頭、劇場には歴史性や普遍性があると申し上げましたが、自分が携わる目の前の劇場が瞬く間に消えてなくなる様では、なかなか、人様に強く言える定義にはなり得ません。また、アトリエ劇研が閉館する際に、それを惜しむ声をたくさん頂戴しましたが、地域の住民・市民の方からそのようなお声を頂いたことはありませんでした。

### 劇場文化は定着するのか？

「劇場文化の定着」を、小劇場の視点から考える場合、根本から考え直す必要がありました。市民から求められ、市民によって長く支えられる劇場というものは、あり得るのか？ という問いかけです。

公共ホールは、一つの解としてあるかと思えます。この稿は公共ホールを論じるものではありませんし、またその見識もございませんが、一点、京都における私見を述べるならば、サイズ・料金・劇場の人的資源などの要素において、またとりわけ実験的な取り組みを行う小劇場の演目において、使いにくいという現状があります。逆に申し上げるならば、使いやすい状況を民間が用意していたと言っても差し支え無いかと思えます。そこで、繰り返しになりますが、民間の活力を用いて、市民から求められ、市民によって長く支えられる劇場というものを作り上げる事ができるのか？ という取り組みを始めました。そ

の主体が2017年1月に設立された一般社団法人アーツシード京都であり、プロジェクト「Theatre E9 Kyoto」です。目的は、「京都に100年つづく小劇場」の創設です。具体的には、株式会社八清<sup>はちせ</sup>の土地建物を賃貸し、リノベーションして劇場を2019年夏のオープンを目指して建設し、運営するというプロジェクトです。

### 建築許可

劇場のリノベーション工事を予定しているのは、東九条の鴨川沿いにある株式会社八清所有の倉庫です。京都駅徒歩圏内にある当該地域は、かつては準工業地域でしたので、工場などが今でも散見されますが、現在は都市計画が変更されて、劇場建設ができない第1種住宅地域となっています。建築を許可する為には、建築審査会での手続きを経よう京都市から指導されました。あらゆる審査会の中でも、最も厳しい審査会の一つという説明を受けました。審査にかかる経費だけでも1200万円かかるという大プロジェクトにならざるを得ない状況が徐々に見えて参りました。科学的な現況調査を実施し、調査結果に基づいて現行法が要求する耐震・防音・バリアフリー等の設備がある劇場を設計する為に、建築家5名と調査会社2社からなるチームを編成し、電話帳のような厚さの提出資料を作成する必要がありました。また、建築審査会は、事前審査・公聴会・本審査という3つの手続きが予定されています。経費の問題の他、公聴会という手続きが含まれるため、地域住民の同意を頂かなくてはならない、という大きな課題がありました。

### 地域との交流

法律に強制されなくとも、地域との関係性については、私個人は、最も重要な事だと考えています。先にも申し上げましたが、市民に支えられる劇場を目指すなら、まずは、劇場がお世話になる地域に受け入れて頂くことが大事です。2017年の3月頃から、地域の皆様に順番にご挨拶に回りました。東九条は、在日外国人や被差別部落出身の方々が多く住まれる地域で、歴史的社会的な課題を抱えています。難しく悲しい歴史がある一方で、課題を少しでも良い方向に



劇場予定地 photo: 新良太

向かわせようと、東九条の公的施設である京都市地域・多文化交流ネットワークサロンでは「多文化共生」というテーマを掲げておられます。私たちは、一人一人の方とお会いし、少しずつお話を伺いながら、今も勉強しています。地域のお祭りにも参加させて頂き、大蔵流狂言方の茂山あきらさんと童司さんには、『柿山伏』という狂言をご披露頂きました。また京都市の主催事業の委託をうけている東山アーティスト・プレースメント・サービス(HAPS)からは、東九条地域で行った振付家を招いた2つのアートプロジェクトのコーディネーターの役目を頂きました。一つは、倉田翠さんに「故郷の家」という高齢者福祉施設との協働でダンス作品を創作して頂きました。もう一つは、きたまりさんと、東九条在住の作曲家バク・シルさんとのダンス公演を、地域の空き地と劇場予定地の倉庫でご披露頂きました。2つの公演は、それぞれ半年にわたるリサーチや、地域の皆様との話し合いを重ねて出来上がったものでした。協働すること自体が、非常に繊細で、濃密なやりとりが必要でした。これは、アーティストの仕事なのかという問いかけを何度も頂き、また自問もいたしました。しかしながら、これらの経験が、作品の糧となり、また、地域の方々にとっては作品理解につながる重要な行程になり得たのではないかと思います。現代舞踊という抽象性の高い作品が、馴染みのない地域において、拍手をもって迎え入れられたという事は、私には非常に大きな経験になりました。私たちは、必ずしも大衆性を十分に備えた作品ばかりを上演するわけではなく、実験性、抽象性の高い作品も多くあります。舞台芸術家が創作する作品を享受していただける土壌をつくること、場をつくる者の重要な仕事であることを改めて強く認識いたしました。

お陰様で公聴会につきましては、実に和やかに<sup>つつが</sup>恙なく終える事が出来ました。ご参席頂いた地域の方からも、暖かいお声を頂きました。2018年6月、準備から数えると一年半をかけて、私たちは建築許可を頂ける運びとなりました。

## ファンドレイズ

プロジェクトの実施には、多額の経費がかかりますが、民間劇場

を設置する為に、支援を頂けるような公的な助成制度は現状存在していません。民間劇場の設置に関する法律が無いのです。従いまして、私的な資産の増強に公金を投入することはできませんから、助成制度も無いと言うことになります。これにならって、多くの民間の助成制度も、民間劇場建築に対する支援は行っていません。この度、セゾン文化財団からは、建築費を名目に助成を頂いています。私たちからすれば、制度の穴とも言うべき所に、通常の枠を超えた大きな助成を頂きました事は、普通は考えられないことでありまして、正に画期的であり、誠に感謝の念に堪えません。

資金につきましては、昨年9月にクラウドファンディングで1900万円のご支援を頂きました。また、その後も、個人・法人の皆様からご支援を頂いておよそ7000万円の寄付・協賛等を頂いております。公的な資金は頂けませんが、民間からの多くの支援によって、ここまで進められています。しかしながら、まだ少なくとも3000万円ほど足りません。この点は、今少しお力添えをお願い申し上げます。

## 京都駅東南部エリア活性化方針

東九条地域には合計で2万平米ほどの空き地が点在しています。目下、その空き地の活用が課題になっています。京都市は、2023年の京都市立芸術大学の移転を契機に、南接する東九条地域を「芸術」と「若者」で活性化させようという方針を2017年3月に公表いたしました。私たちは、民間の取り組みではありますが、偶然にも目に見える最初の取り組みとなりました。劇場単体で取り組めることは、僅かなことかもしれませんが、文字通り、東九条が芸術の町として活性化するのであれば、私たちは努力を惜しみません。あらゆる芸術が創作される町、それを楽しむことを知っている町となるように、努力を重ねたいと思います。これは世迷い言ですが、その空き地の一つに、京都市立芸術大学の舞台芸術学部が新設されることを望んでいます。既存の国公立の芸術大学には未だに、舞台芸術学部が存在しておらず、また、その事もあまり知られていません。明治新政府の頃、東京美学校に舞台芸術学科が存在しなかったことは、舞台芸術が教育過程にプログラムされず、従って、興行場法等の法体系においても、教育という概念が内包されていないという事態に結びついているのでは無いでしょうか。

## 舞台芸術それ自体が公共

私たちは、無いものを作ろうとしています。それは、ブラックボックス形式のおよそ100席の劇場です。それは、一個人や一つの会社ではなく、多くの民間からの人的・物的・金銭的支援と、行政の金銭以外の支援によって支えられています。出来上がった劇場では、現代舞台芸術が創作され、発表されます。これまでの民間劇場では考えられなかった創造環境を整備し、多くの舞台作品を創造いただける場としたいと思います。今後も議論の中で、或いは現実的な経済の中で、作品創造に繋がる仕組みを整備できるよう努めて参ります。なんとと言っても劇場の本質は、作品です。出来上がった作品を、地域の



現在倉庫であるこの建物が劇場となります photo: 新良太

方を始め、広く市民の皆様に享受して頂けるように努力をします。更には、劇場を確実に次の世代に引き継ぎたいと思います。その果てに舞台芸術は、地域に定着した文化となり、舞台芸術それ自体が公共性を帯びることができるのではないかと考えます。この稿を読んでくださりありがとうございます。今、私たちは、産みの苦しみのの中にいます。どうか、ご支援の程、切にお願い申し上げます。

### ●アーツシード京都から寄付のお願い●

これまで多くのご支援を頂きまして誠にありがとうございます。現在、劇場を作り出すための、最終局面にあります。今一度、皆様からのご協力を賜りたく9月21日より、クラウドファンディングサイト「Readyfor」にて資金を募っております。詳しくは、アーツシード京都のウェブサイト(下記URL)をご覧くださいましたら幸いです。皆様からのご支援をお願い申し上げます。

一般社団法人アーツシード京都

電話(代表): 075-744-6127(平日10時-18時)

ファクス: 075-744-6545

E-mail: info@askyoto.or.jp

URL: https://askyoto.or.jp



### あこうさとし

劇作家・演出家・(一社)アーツシード京都代表理事。1976年、大阪府生まれ。80年代後半から90年代にかけて香港で過ごす。同志社大学法学部卒業。「複製技術の演劇」を主題にデジタルデバイスや特殊メイクを使用した演劇作品を制作する。代表作に「total eclipse」(横浜美術館・国立国際美術館 2010)「複製技術の演劇—パサージュⅢ—」(こまばアゴラ劇場・アトリエ劇研 2013-2014)等がある。2014-2015年、文化庁新進芸術家海外研修制度研修員として、3ヶ月間、パリのジュヌヴィエ国立演劇センターにおいて、演出・芸術監督研修を受ける。京都国際舞台芸術祭2016 SPRINGにおいて、ショーケースキュレーターを務める。2014年9月-2017年8月アトリエ劇研ディレクター。2017年1月、(一社)アーツシード京都を茂山あきら、やなぎみわらと立ち上げ、新しい劇場をつくるプロジェクトを開始する。同志社女子大学嘱託講師 京都造形芸術大学非常勤講師。若手演出家コンクール2007最優秀賞、利賀演劇人コンクール2012奨励賞、平成29年度京都市芸術新人賞を受賞。2010年度京都市芸術文化特別奨励制度奨励者、2013-2014年度公益財団セゾン文化財団ジュニア・フェロー対象アーティスト。

## セゾン文化財団 法人賛助会員の募集

セゾン文化財団では、当財団の趣旨に賛同し、活動を支援していただける法人賛助会員を募っております。

新しい文化を創造するアーティストたちの創造活動に、ぜひお力をお貸しください。

詳細につきましては下記URLにてご覧になれます。

<http://www.saison.or.jp/support/index.html>

### 法人賛助会員のご紹介(2018年10月現在)

当財団の活動に対しましてご理解・ご支援を頂いています以下の法人賛助会員に深く感謝いたします。

株式会社パルコ <http://www.parco.co.jp/>

## viewpoint セゾン文化財団ニュースレター第84号

2018年10月10日発行

編集人: 久野敦子

発行所: 公益財団法人セゾン文化財団

〒104-0031 東京都中央区京橋3-12-7 京橋山本ビル4階

Tel: 03-3535-5566 Fax: 03-3535-5565

URL: <http://www.saison.or.jp>

E-mail: [foundation@saison.or.jp](mailto:foundation@saison.or.jp)

●次回発行予定: 2018年12月 ●本ニュースレターをご希望の方は送料(92円)実費負担にてセゾン文化財団までお申し込みください。